

北國新聞「新聞読んで」感想文コンクールにおいて、応募総数 6113 点から本校生徒が「高校生の部」で**最優秀賞**と**優秀賞**に選ばれるという快挙を達成しました。

《北國新聞提供 令和元年 11 月 15 日(金)朝刊》

最  
優  
秀

今から約3年前に起こったこの事件を、今でもよく覚えています。当時中学生だった私は、19人も尊い命が奪われた事に胸を痛めるのと同時に「障害者は不必要」「死んだ方がいい」という犯人の考えに衝撃を受けました。あれから3年経った今、この記事をきっかけに相模原障害者施設殺傷事件について考えてみると、犯人のもつ「障害者差別」の考えは、私達の心の中に、この社会の根つこの部分に密かにあるのではないかとほっとしました。それは、私が中学校の頃からあったように思います。クラスにいた障がいを持った子は周りからかわれられていました。幼い子供の社会でも差別というものがあたり前にあることを肌で感じて、そんな社会の一員であることにひどく嫌悪感を募らせていました。しかし、そんな私もやっぱり障がいのある人を見て「かわいそう」「五体満足で幸せだ」なんて思ってしまうのです。

看護学生になった夏、私はそんな思いが180度変わる出会いをしました。私が利用者さんのお手伝いをさせて頂いていると、その方はこんな事を仰りました。「若いのに苦勞さん。本当に感謝します。僕はこん

## 健全と障がいの境界線



おけやあやめ  
田鶴浜高2年 桶谷 礼愛

な体になるまで人の事なんて考えても来なかった。だからこの体になって良かったと思つてます。有難さが分かるようになり「私はこの言葉に胸が熱くなり、涙が零れぬようにただただ微笑み頷くしかできませんでした。障がいを持ちながらも真っ直ぐ生きる彼は眩しい位に輝いていました。彼の言葉は私に障がいを持つことに見える世界があることを教えてくれました。きっと健全者と障がいのある人の中には優秀も境界線もないのだと私は信じています。それを作っているのは、私たちひとりひとりなのです。その結果が、こんなにも痛ましい事件を許してしまう社会を造ってしまったのではないだろうかと考えさせられます。障がいのある人と関わる事が多いこの道を選んだからこそ、彼の言葉を何度も思い出し、同じ立場に立って寄り添う姿勢を忘れないでいたいのです。私一人が変わったところで、今もなお「障害者差別」の姿勢を崩さない犯人やこの社会を変える事は難しいかもしれませんが、私の気持ち、援助の姿勢でこれから関わる、一人でも多くの人の心に届くことを信じて寄り添っていきたいと思います。



みなさんは人生の最期をどのように迎えたか考えたことはありませんか。今、私が一番家族に考えて欲しいのは、人生最期の迎え方です。老衰が理想的な形ですが、みんながみんなそのような形で死を迎えるわけではありません。もし、家族の病態が急変し、延命治療をするかしないか判断しろと言われても、家族と何も話していなかったら、自分の意思だけで決めなければなりません。そうなる、本当にそれで良かったのかと後悔が生まれることがあります。自分の最期は自分で決めるべきだと私は思います。だから、みなさんも自分の最期を少しでも考えて、家族と話し合ってみてはどうですか。後悔を少しでも減らすことができると思います。

この記事を選んだ理由は、超高齢社会の日本は今、死と医療の結びつきの意味をしっかりと考えなければならぬ時代になったからです。自分のたった一度の人生、その最終章に医療をどう活用するか、自分で考えなければならぬということを知ってもらいたいと思います。

私がこんなに『死』について考えるようになったきっかけは、あるNHKの番組です。安楽死が認められた団体があるスイスで、一人の日本人女性が安楽死を行ったという特集でした。3年前に、体の機能が失われる神経難病

## 死と医療の結びつき

田鶴浜高2年 石川 菜友



と診断された女性は、歩行や会話が困難となり、医師からは「やがて胃瘻と人工呼吸器が必要になる」と宣告されました。自殺未遂を繰り返す本人から、「安楽死が唯一の希望の光」だと聞かされた家族は、自問自答しながら選択に寄り添わざるを得なくなりました。そして、家族はスイスでの最期の瞬間に立ち会いました。薬を入れると5分以内ですぐに永遠の眠りにつきました。それを見届けた家族の思いに私は胸が痛くなりました。この番組を見たのをきっかけに、私も『死』と向き合う患者さんとその家族の支えになりたいと思いました。まずは自分の家族から、人生の最期の在り方について考えようと決めました。

人生最期を迎えるには、死生観を持つことが大切だと気がつきました。死生観とは、生きること死ぬことに対する考え方のことをいいます。死生観を持つことで、死について考えて準備することができ、自分にとってより良い最期を迎えられたり、死に対する不安や恐怖心を軽減させ、『死』のイメージが変わり、最期を考えやすくなったりするのではないかと思います。『死』に向かって生きている私たち、必ず誰にでも『死』がやってきます。家族と納得できる形で話し合い、後悔のないよう生きることが大切だと思います。